遊 …… 新作

一 出 新 當
作 画

鳴 文 衣 濡
作 画

江戸 …… 同
作 画

同 五編 …… 同
同 三編 …… 同
同 初編 …… 三同

A449
3

鳥追松まつ
海上新話
三編
假名垣魯文閣
久保田彦作著
陽州富周延画
錦榮堂藏

鳥追阿松海上新話 三編

三篇上

寄延筆

御誂向

株屋

とりおい

阿まつ川

海上新話

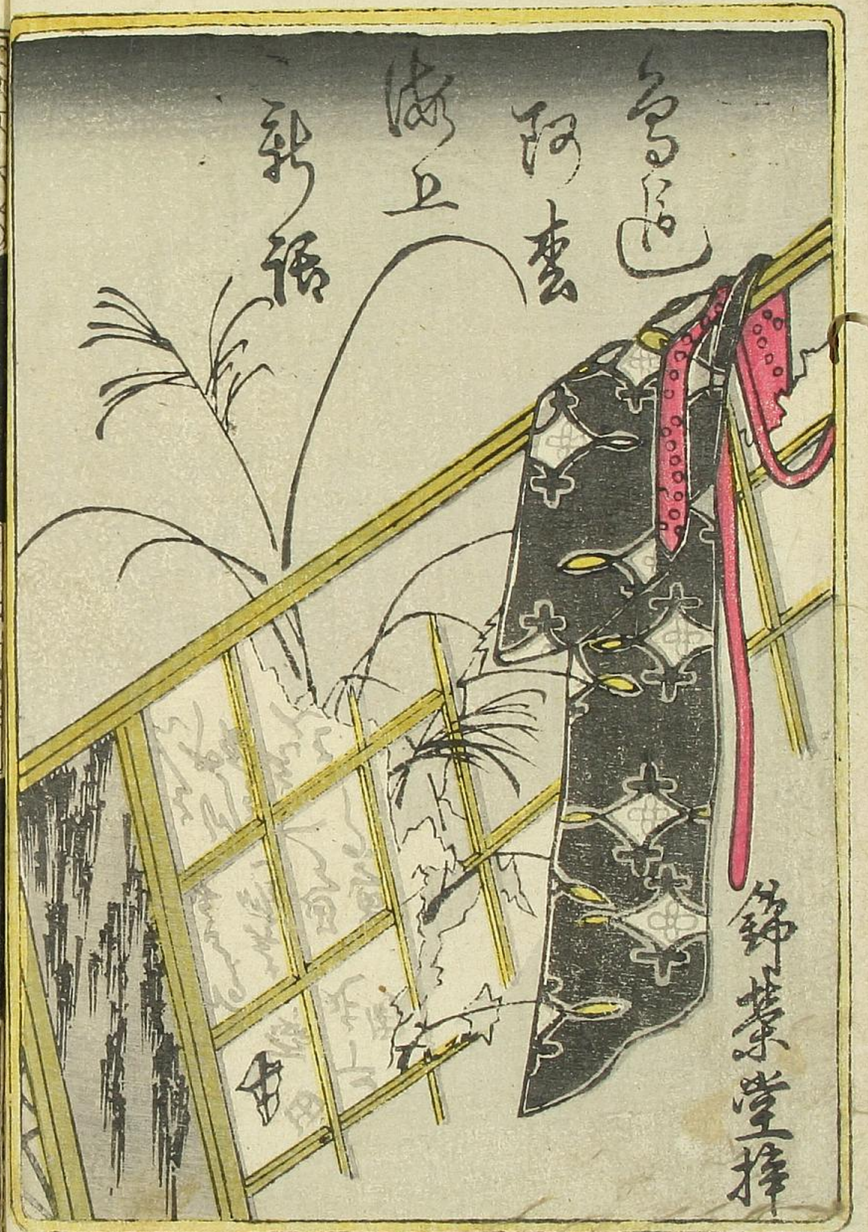
俊名垣魯文閲

久保田彦作終

錦葉堂壽梓

48-8122

三笠附下
三笠附中



緑の林白浪阿松ハ笠松嶺の高く聞え塵塚阿松ハ濁り江の深きに染まぬ心の潔白善惡の二河白道物見れ松の曲まる枝も操の松の直なる梢も籟々颯々乃声に應じ千歳不朽り醜美を鳴らすや非常有常の差異なるあらん茲に物せる鳥追於松も幸ひ明治の旭に照らさる新平民の列に属せど心の穢を一洗せば汝が罪汝を責て神經病の苦惱に臥しあらぬ最期を假名讀に陸續號を継ましも畢に此大團圓に終焉を示し長譚常盤れ色を潤筆に猶染脱し久保田の強記今版當に局を結びて勸懲の意を全うせり喝采々々

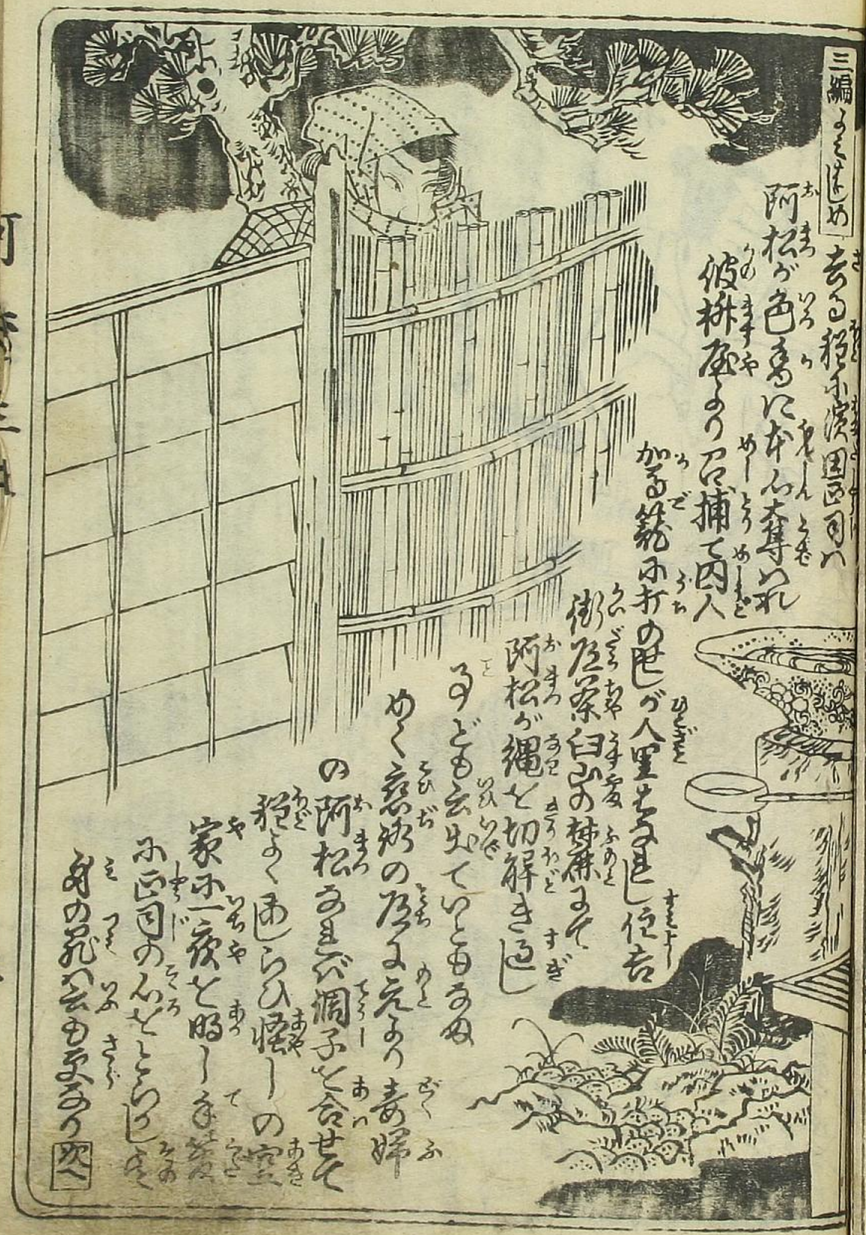
明治十一年三月

假名垣魯文誌

貞婦安子
於松丸

三澤重明

濱田正司
濱田の妾
阿杢


三編 はしめ
去る程に濱田正司は
阿松が色香に本心奪はれ
彼桃屋より召捕て内人
かる籠に打の世が人里ちな世位吉
御乃家臼の棘にて
阿松が縄を切解き通し
るども云出ていとも安ぬ
めく意外の乃に元より妻婦
の阿松なれば調子を合せて
程よく通らひ怪しの室
家に一夜を明し手袋
に正司の心をとらせ
身の死は云も更なり
次へ

つぎ 猶ひ却て僥倖と

その後は或旅 なり 宿に籠くかくまひ匿し 由志継郎のもとへも なりければ正司ハ 阿松とその 侍ふ 畜へ 連て行んと

▲彼の光陰に関守なく 夜ハ半年まごとし一昨 是ハめぐる 明治三年の 如月の 頃と ある日が 兼て正司は

出てどが妻妾 子ハ扨まに相合ひ 貞操堅実の女にて 稚ハ実家ハ九州の 或大藩の武士にて 筋目正しき者なれば 流石に正司も妻の 手前いかゞあらんと 独らへば阿松ハ其後 長町裏に妾宅を 構えさせ婢女一人 と付添て何不足 なく暮させしが▲

そが 妻の 心もさき 性質 とて 嫌 がる あさましき 邪の 恋の 旅へ

友阿松が

次へ

つゞき 淫婦と悪事にハ抜目の▲

▲ 大きさ 大ん にあらず ◐

◐ 日毎に妾宅へ

のゝ寝泊して 本邸へハ少も寄へ らざれば淫酒にのゝ 浮けしうば自然とお上の 首尾悪敷く此後の身持 ゆくハ 終に免友 にもあらざ 撰子に妻 の安子ハ病を痛め何卒妾の阿松とゆらを本邸へ よびよせて一ツに並ばお身のゝあ此後世上も開化に進ゝ 正権二人ゆの妻あるハ捨家の習ひと人も咎めば何 卒して本夫正司に此事を云ひでんと本国より ☒

◐ 此ことを云ひ出せ 家に阿松の妾宅へ 時ますせ種々の 縁り抱まぜ何 これと安子うら の心身に正司も 初めて安堵を送 阿松の素性を何を撰へ ていろくに紅縮ひ本家 在勤の七の打に深く 副深し柳橋の藝 妓ありと偽りて素な 本妻安子にも 図

☒ 数年の日めし 往返佐助と いふ芸能 に人知 れ ◐

つぎ ひき
今世互
ひよ住来

巨悪うし」が
あらつる
生涯妻は阿松と
定めて一ツ家に
大きふ悦びその
筈ふまりて阿松と女房
筈とあらそう阿松は物しり
顔にて
代官前より金百両と
取り返
とつくくも
その手ぐち
肌へ
しのび
入り

○有按ずるに安永又は寛政の阿松が
情夫の大坂者は徒悪の
徒生を見るもよろこぶ
のこと乃ち一ツ家に
悪坂の波入堀ふ阿松の
母とい合せ松茸のみ
代官前より金百両と

世の人にも知られんとまよ
笑ふみ二年を経されば表
ふ暇る処も尽と稼ふ本家
ふ引移して背くふ変る
撰妻風のとぐ笑
顔の新たも
移ふも況浪花
ざくやき水よあくひ
あび程二階の客納をあび
ふの風ふ当もひこも外面い
出も叶ざる彼殿の討ふ家業
して玉家と立ぐ妃妃の妖狐ふとをるふす。

▼日夜
唄ひつ
舞うどして
酒池肉林の
歓楽ふろそ
をる

◐ふ川雄こて
捕物ゆつき阿松い
その悪をの罰に
右腕のみ法度
引ふあれ種くれ
味もありなれと
阿ハ彩改を施爽
今まて生ふ在ぢあの図

田舎源氏五十四条　二帖
大日本物産圖會　五帖
俳優三十六花撰　一帖
東京開化卅六景　一帖
小学入門彩色入　一帖
冂寸珍本　一帖
鹿児嶌實記一夕話　三冊
鳥追於杏海上新話　前　三冊
冂後篇　三冊
古今名婦傳　一帖

和漢書籍
東錦繪
問屋
出板御届

編輯　久保田彦作
東京第一大區六小区通一丁目十九番地
出板　大倉孫兵衛

上の巻のつゞき
夫に付て
も今ほい
何処にとりて
居るところと思ひぬ
月とてハ一日も心で
泣て居るこらぬ
のろいせうだが ◐
きこいうら今迄居る ⧗
◐是阿松
まゝ前いおれ程
思やア志めへと
いへば阿松い
涙ぐミ二人の
心も志らまいで
よい大がいの虚計り
邪して否な妾をして
旦那の機嫌をとると
いつもどふぞ再び
お前に逢積る咄しを
きこいうら今迄居る ⧗
⧗ 真似
をして
生のび
たので
ござん
せと
男の様に
ちきぶり
あとろび
かる梅
子の面
につぎ

つぎ 脳める

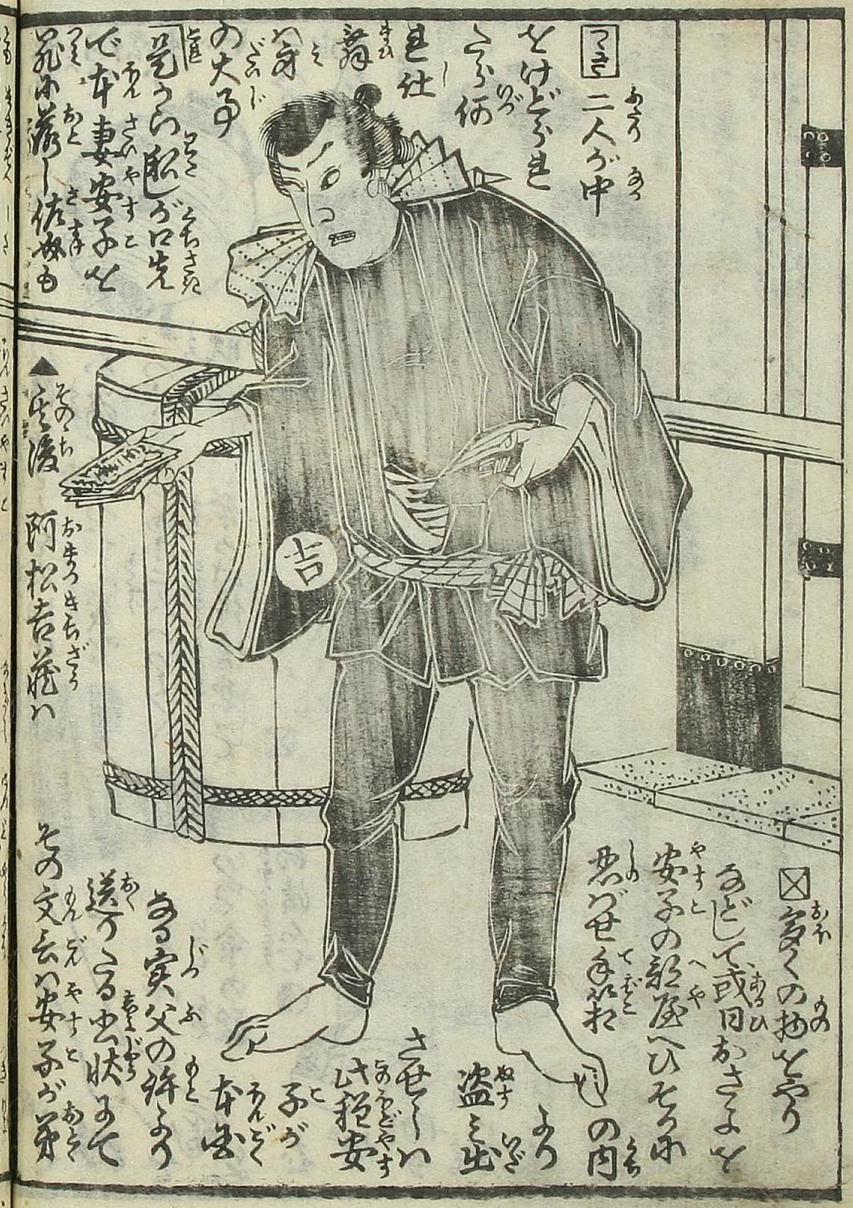
◐襟繋とりて引倒し佐助は怒まるとぞ荒らげ大悲うけおもさ夜の目をかすめ大擔な不義淫行已がめに掛ってからい

風情なり吉は
心も有頂天「そう
いふんと書知らば
是迄恨んだ是深さ一ツ
邸に居るといふもよく〳〵是ぬくされ縁
只形の眼つゐを思ふのごろか永くなりては
二人の身の上「それに知れては命づく悟られぬ内少しも
早くと反古で強る二枚折の屏風の内に為となる
折しも雲るにさす月の照せてかぐその忠僕佐助
兼て阿松が素ぶりといひ合点ゆかざる丁吉荒
必ず不義と目を付て宵から小蔭に窺ひ得と
実さいはん届これば此時戸を開け内に入り不義者
動くなと契りけられ二人りは物り是退くを◐

つぎ 洗ふは好まねば友はぶんの足を丈 図

めか運の是に不足
形の出来引て行と
退引させぬ調づめ
退れんものと阿松は
こぎと浅をこぼし佐助の裾に
知せたり「今天何と云除」さ
とて不詮ぬてゆかざるまいが
えらの吉さんとは云号といつか
退れの唄云に縁も見ゆる毒
婦が口先吉はぬからぬ佐助に向
ひ「たゞ不義とは云ものゝえらいへば
我女房只形とそゝるまと血に血を
洗ふは好まねば友はぶんの足を丈 図

つゞき退ぐ
して下さ
れと二人の
余義なき
所為とのひ
兼て阿松を
かどわかし連て
来ら逃げる
とゝ合点
見るとその言
今荒立ては悪かる
と我路よりくゞ
又おく捜のお逃す目
如何とやくば
祠を
げ
二人ハ尋
向ひ居る
との
入
さ
け
を頼んだら
手ら兼て存知の中とは
今宵のうちは見切りにしてくれ
以後は此二人を大切に
お前をかうでお義を
つくせといふに二人はよく
お前が
つきて佐助は本妻安子の附人
命の親
向後は
足
久て
大事
とん
掛出し
流れ
八時を
手すと
手を
合



さき 二人ゞ中
をけどろき
ろゝ伺
皇社
藩
ゝ守
の大夕
皇
皃ろの駈ゞ口先
で本妻安子を
死ホ落し佐ゐも

▲その生涯 阿松吉蔵い

☒多くのおとろ
ろどして或日おさよを
安子の部屋へひそホ
忠ゞ母をれ
の内
ろゝ
盗ゝ出
さゝくいい
ゐゝ招安
ふゞ
んゞく
な出
多実父の仲ろ
送ろる出状みて
その文云い安ふゞ第

共ホ連里家に有の
劔で寂滅さゝろ
い約ことゝ耳ホ
いゐあせさゝやけべ
ゝそんろゝ下女の

よをろゝひ
下婢のもさ

何事ゐ今始洋行も事情緩
貴ホいきろふ望あれべ見よ
金子を手達ろれ
とゝ彩その状ゐ右
と

おさよを
五
ホ
細
ユい添ゝ
その内にと
二人ハ私の底
ろゝ母家をさ[ゝ]てゐろ▲

兄ゞ東

阿松い悦び馬
おさよゐい礼をあゝ
手渡ろ五円ゞ届ゐるろひて

つぎ 金子を入る重てる手箱の内より金二百円を盗ミ出し其後に彼手紙を落し重奪ひし金子ハ吉に後し妻知らぬ顔で居るのしが

◐

☒ 交中正しく并が洋行の無心状ハ甚勇盗しなるんと一図に妻と其の之を実無に難きをとらへ己も我目をかすめ二百円を盗しと是にて白状いさきねばかゝき目に合せんと暴く忠兄生の怒り安子ハ涙に乱もうろくえより

安子の兄三澤重明

◐ 正月ハ或日手箱を見て二百円が不足なれば胸里数る程安子をしのび若や其方ハ知らざるかと尋ねに安子も数る程てそこらを隈なくさがせしに ☒

里方より送りし手紙が義教あれば心に数るき寝るへ押隠さん と ▲

▲ 其る和を折悪く本来に見られ隠せハ相乱と手にくれあげ「とりや其方ハ里方が送りし出状と聞きいれば ☒

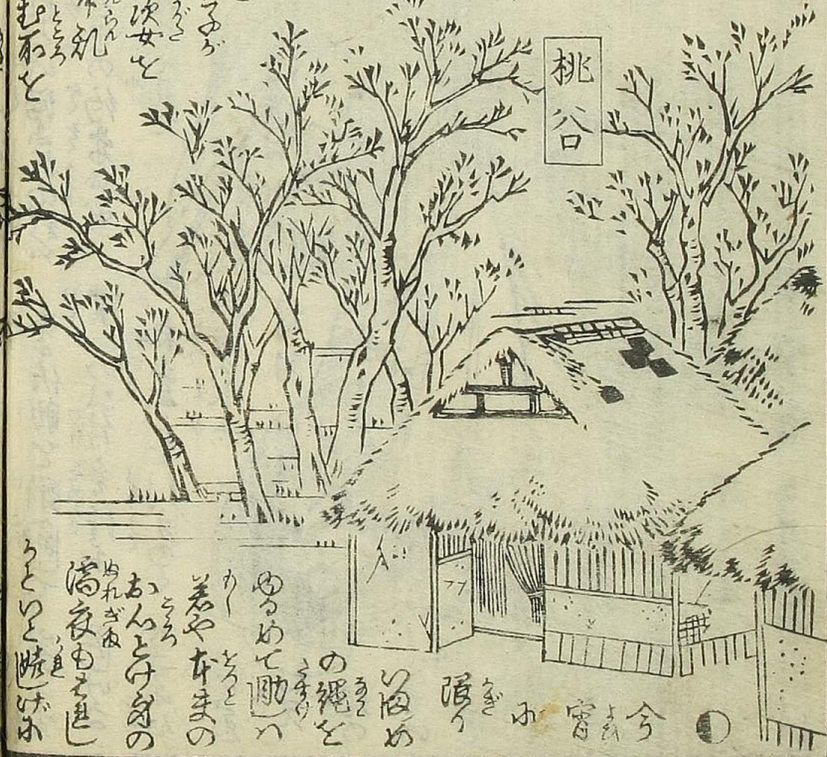
ことで彼出状を受に捨てありしと あへど今来 ☒

つゞき 新とあの今更ふ思ふ
ことそでさお怒
のある事でふ仕方
解放乳
牡❶
❶ことふ
実家め
ふんぬを
文作ふ
兄と
犯しそある
く後ー
右長拍拍
ほめふ安ふい
待ちも
絶入行
も武士
の
▲妄執ふ強き
日もあそらまふ
つけ拍拍や
拍炭
☒書ふれぐちの
黒さふ
く
と
小
当

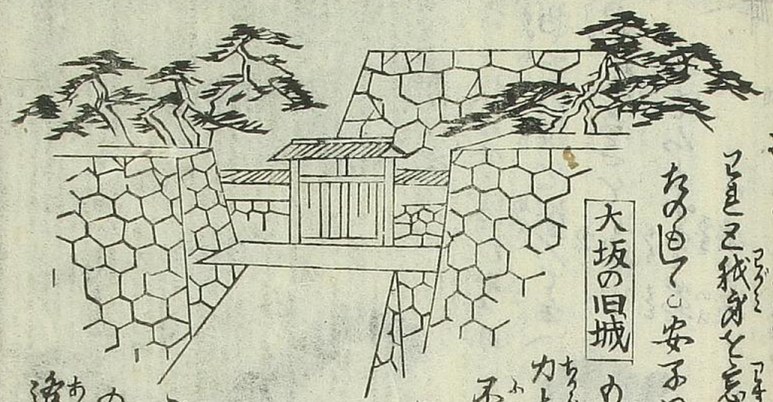
父娘ら実の兄への形と吹ふれどけ拘ふ拝
中ふふ立ぐしかる安実もふ世の約束必ず
お暇をふやしませぬと覚悟拍ふて用と
眠りおび入ろ体ふれば
狂そつのる
病
癖
ふ世の
焼ふふ通り
身の死ふ云作ふく覚拍拍ふ
体ふ不潤盗人猛しい今ふ付とふふ
その身の積産先の拍垂ふしてお教ふ
自得とふほめもかようき女ふんこるふ小る賢い郎そ
▲
止る依助を断絶て家ふ生
僕ふふ付を作ふ 思ける
拍雲ふとそ引ふく
日☒
ふの水ふ
夏ふれべ西日ふ
侍ふい熱湯ふ
落き若痛ふ板
日長き
悩ふ者
覚
郎の
てい
そめふ四五日行り
次

つぎ

食物もふえば夜に股本
がまで身はこゞ足の動く計り
既に命も絶なんとおふ所へ拘
並の従者明て小聟になり
奥さゝくと呼めのあり安子は
夏が現かと目を開いて此方
をみまれば日頃力と頼しし
佐助「ヲ」そなたは佐助か
「ヲ」奥さゝ女よふ所無事で
お出なされ返しこと佐助は安子が
なさけなる目も当られ彼女を
みて涙に目もくれ手も半乱
安子が縄目を引ねど痛むかを



今宵に限り
いゝめ
の縄を
ゆるめて助は
若や本まの
おんとけ身の
濡衣もそれし
うといと断げに



拝さまりおはずワット涯いぐし
ひまて我身を忘れたる右衛の程ぞ
なのはして安子はかゝる助けを頼しは
のしや差うとおひきや
力と頼む佐助なれば
不審せまだと小聟に
なり「ヲ」ふはが加る憂目
に逢ひ今宵で四日この
拘並に身はいほめに聟
がれしも我まのお怒りは
身に覚えなれとなぶら本人
の出るまではことへこんな目に
逢ふともおつと憐へてゐる覚悟

うい図へば佐助
は侍に手をつくへ「ヲ」ものその
作せなぞなぶら此佐助も最
さ逢稀とお縄をなぜと一旦の
あのお怒りにお心解せ此夏の
日に含物さへ見上ぬときて
せめてあなたへ捉版なと人
目を恐んで見上んとおへと
夏はいたる目かぐ鼻日頃
あなたがお目かけられ
おつかひなされこれ老
さへ旦那さゝへ気兼
して誰もんで「ヲ」

つぎ　ぶんだろう
されど日数
を経る値は
やしか命
にかく
ちる
うとんを寃に見
なるねど今宵ひそろに
拘重の鍵を盗んで去へ
思ひあなたをお逃し
ゞもんと小童箱
より握り版
二ツ三ツ丸いでし▲

▲平老
あなたは旧持病に
多くはあがらぬ之度の
お食といひながら永の日をと
いひつゝ後もせれあへぬ粟きんは
一命をつなぐ今宵の湯拘と安子は幾分
押いたれ「いつに変らぬそちがん切忘れはせぬと☒

なされる時はいろ
汚名の晴る日迄されば
今宵人知れぬ裏の高塚のり
越へて遠くもあらぬお見イさなの
お家へ暫らくお身をかせ
お身の墨りをたらさせ
今真茅を当れバとて死ての
後は誰かたらさん大死するより
少しもすくと佐助が何に安子は
難る「こらつて延ちへ此まゝに

かんとけ
ねばはまくに
餓死して
おもて◑

【つぎ】夏と首尾よく立退く共必ず　※その上にまつらぬ事もちらつとしつがりし此
後でそなたの花といふを打消しいふ　るをや出しまづ此三個のお身の上とおもへばなぐと
立て「その御案ゐ事はきるゐ事ゐ」ご此　捨へる心中「是すく不義を是得めても
佐助は只今迄の御恩報じ元より命は　明ていまれぬ此身の因果律に夏を退
捨る覚悟後にはかしもお事をひまされ　是出まづ後でうまらばそなたの雅義
まつなと事をたげ出安子が私出繁　「それも此身の災難と命にかへる佐助が
元あげ分抱しつて伴ひ出「アラ恐へばかる　たる事「こはいへとすく死をき世生まづかへ
憂目をたるもいつぞや捨妻阿松が不義　ては義理ならば「今更それは此未練と死
のお手は既に石抱へし吉花なりと云　を決したるけまづさに安子は後に今是
傳しも忠義や只報へその事を告んと　たるが待に佐助がせ死立て人に悟られ
思ひ隠悪をすくも包む裏表あるこ　是外ゆられまづ是世忠義も所の泡と
死をかりかけ也彼奴二人りが仕業とは　泣入る安子をたげ出つて終に裏手の塀
ゐに知れど阿松が出所定かならざる※　を越へ安子を助け出しなり

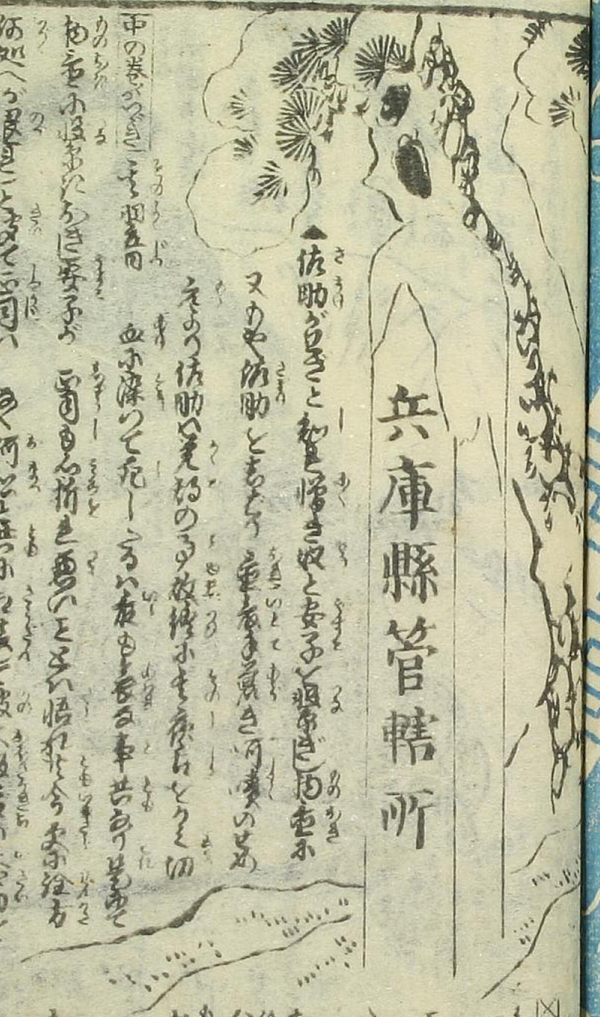
下の巻へつぐ

田舎源氏五十四条　二帖　[illegible]
大日本物産圖會　五帖　大黒雅画并豆本志あり
俳優三十六花撰　一帖　千代純数并口絵画品
東京開化卅六景　一帖　芋[illegible]
小学入門彩色入　一帖　[illegible]
同　寸珍本　一帖　諸流[illegible]古本あり
鹿児嶌實記一夕話　三冊　重礼目録手掛[illegible]
鳥追於蛮海上新話　前　三冊　百人一号并諸[illegible]
同　後篇　三冊　新製[illegible]文人画[illegible]
古今名婦傳　一帖　東京新園并[illegible]

和漢書籍　東錦繪　問屋
岩板御届

東京二大區三小區[illegible]十四丁目二[illegible]
編輯　久保田彦作
東京第一大區六小区通一丁目十九番地
岩板　大倉孫兵衛

兵庫縣管轄所



▲佐助が口きこと知れ憎き奴と安子を撃ぎ両重に
又もや佐助とまたり重を奪き何嘆の甚め
そもり佐助は見殺のるゝ故縁に其夜もとかく切
血に染つて死しこるは夜も長き事共なり是にて
両重に収まれたるは安子が　両目も心折れ悪いことは悟れたら今更に絵方
何処へか退はしと望て正司は　なく阿松と共に相続して彼大坂吉に委細と
打撃れ叔は家内に人知れば　合ませ度死の体に披露して抜捕に死数
助け者がありしと怒り　に堪兼　と拘め密に寺院に葬むりしとぞ
男女とは寄せ厳しき吟味に▲

○叔も安子の実の兄は我妹に満足させ

☒剣（飛鳥の
和重を遣る
と共怒りに
之を挟判
なれ共惨殆
飛鳥の志を
出されば安子
が兄もあて
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

☒拘留の身とうらじろえよう教条の死骸あれば
つまこゝ独身で有とらくに切因縁ゆゑ黒こうの手
かゝるゆゑおつぎと阿松が
妾ゆゑ
うれしやこゝろ彼の
死こゝろの
用めくへの極る
足しづめも死
せーとまされば
密ふ者とかくく

遠う支ゐこ事とも
世の法ゐのふどく九実盗ん
神さらバさされど天網恢るとうく
逃ゐ四ツ谷の勤向も邪のこと
おもありて波依助が撲
死ゝ深ーこ勤ゐ
傷け当ゐ死ゐ由
捕ちの代と神ゐ蔵
賛ゝ免せくゐ
ゝ上ゐ
拘引
せくゐ云
神さらバ捕盗ゐ

☒金子八
長状調
人智代支ゝ夫婦ゐ
殺ゝら死さくひ
ゝ支ゐ
遠くゐ

☒鉄炮かくさげて猟人がつまさきり木穴
其のやうに数多の猟人に追ひ雪に
火縄を消されば猟師木のマッチ
あらば殺てと思ひくれど
彰に猟人は数るので

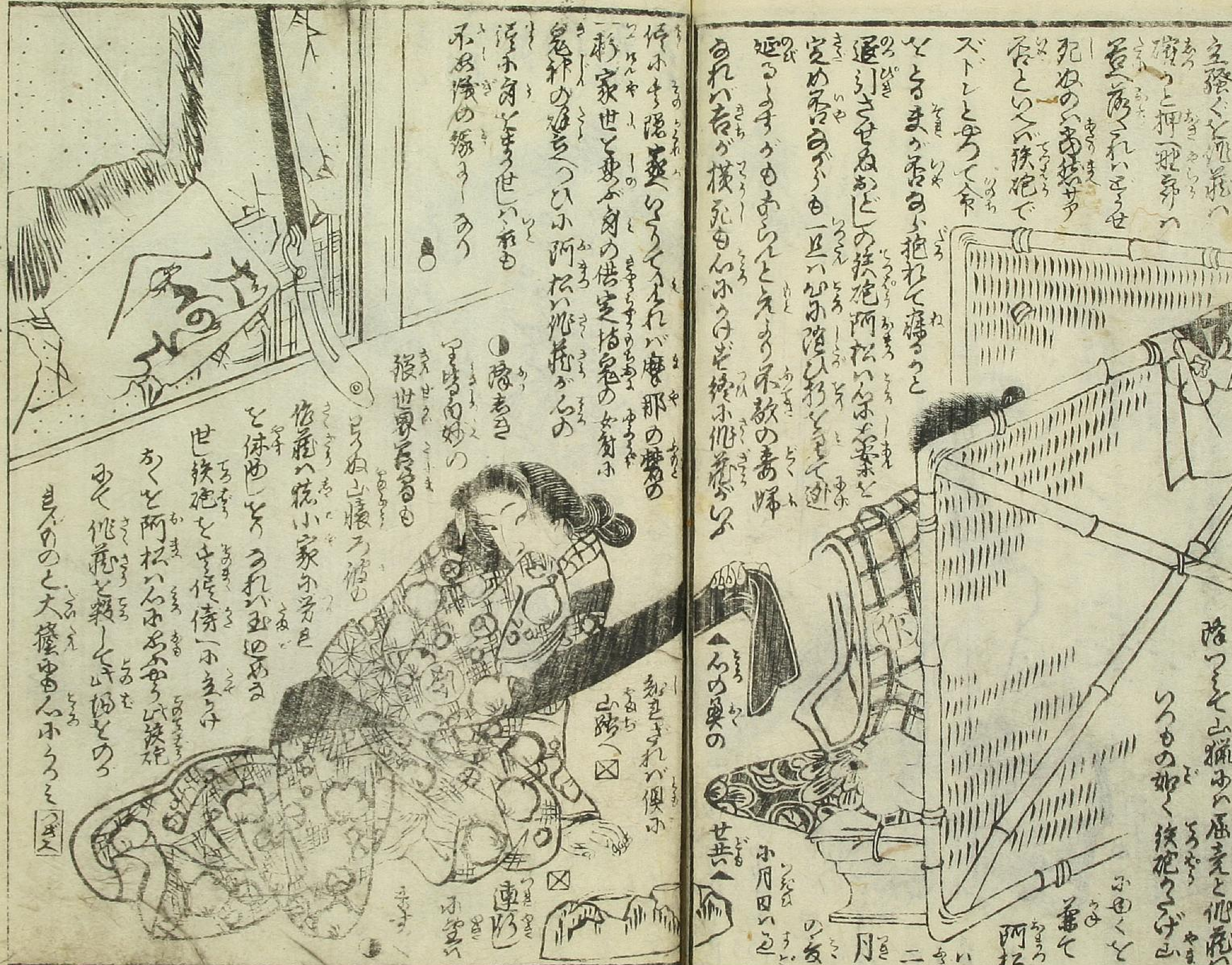
さずあが所て
人に慢めらぬともとぎこと
色男の檜若ある妻の
借家に身を留め置く◐

きそめいつぞや
駿河路にて海へ
落る阿松あら
ぜひとられて疵ある
二人自慢のくくも
且が手の坂若杓引
さ且し⧗

⧗根舎の佛庭とあるこそ鉄炮を
に橋逃げ死んだと思ひしに
あやめくも寺ね縁あれ
あの百年目かの因縁
不思ひしも摩耶山で出合
さうも飛身は中宮
て行き掛て藤から
う知らねばかる佛前の手
笠をつけて鬼をあぎ
むく拳ひもて鉄炮
撮おげ打たんとすれば
石塔をかと大坂吾
羽をの懐剣抜き

◐落ちてくし足を踏みはずし
正司が家残のことゆて
二人が在家て
許るとのて二人
いと多く居たまえ
に再び東京へ御の身浪じて御逍遥んと
そこく家とおっと暮しつひと旅立
世が死の較ひか為あま迷ひ彼津の國の摩耶不ありと
者に咲きし摩耶山の林廊に加えし千頃は極月中旬の雪深とも
二人が死に添うる雪風烈しき摩耶おろし人も通わぬ所なり☒

ちひに遂じ桃じ
が九十九折
山
谷の崖より落ちて足を
すべらし
大坂吾へ落ちる
ある数丈の谷へ
落入とり
[つぎ]



つゞき阿松は吉が落たるにんもせず〳〵に
三強ぐと飛龍へ
寝つと押し飛郎へ
首へ落されいさう也
死ぬのは我まへ掛けサア
否といへば鉄砲で
ズドンと打つて命
とるまでが否はふ抱ねて寝るのを
遅引させぬおどしの鉄砲阿松はなまじ命を
定め否かだうも一旦は如何に貞と操を立て通
延るよすがもあらうと是より不承の毒婦
あれは吉が横死もんにうけぞ続に飛龍がいふ

●去ほどに世の中をおそれ家をいでし梅と暦とその月もはや過
の末なりしぞ新暦の名もすぐさまく日を過れ
路つたへて山猟師の庵と飛龍は
いつもの如く鉄砲をさげ山
に出るとて
筆て
阿松

▲んめ奥の
廿五▲
小月田いるのと

侍にも隠れてあれば摩耶の奥の
一軒家世を忍ぶ身の借宅情鬼の女賊に
鬼神の遊ぶへつひに阿松は飛龍が心の
儘に身をまかせしは是も
不思議の縁なり

◐阿松は
ますます内妙の
強世界に
なりぬ山猿の姫も
飛龍は猿は小家に労も
を体めしその縁はのちの本
世鉄砲を主従伴ふに立
かくと阿松はなに心なく
まで飛龍と親しく山猫どの
是ぞものと大盗賊とふところ（つゞき）

急きまれば傍に
山路へ☒
連れ
小☒

四

つぎへ うそ 鏡 あれど 一生亀 鉄砲で 侍庵 貝 打 が外 せん◐

☒ 殺さうとは可愛さ余つて 憎さの猿 して いひつゝ山刀を 阿松が背より切付ける 一生亀 下 どうで 空

◐ 諸共に山 筆く一発 の筒 彼方の岩間へ簡 打込んだり 庵の 婦め鉄砲で我を殺さんとするか 今こそ 世の ☒ 大 目 ◇

つぎ

大ゆの雪城なる再度山の近辺なれ

笠を踏み一人の旅僧行脚の笠に墨深の夜も白く行脚と杖を力に歩行来り傍を見るに女の死がの央に笠に埋まるあり旅僧敬る事立寄りて某を与へ抱起し数度上げて呼生まれば息吹く人心地も付と見え傍りをきまろくいん上をに旅僧は眩びて女中よ心は付くるとしかに阿松は形を改め何国のお方か

次へ

阿松が実
ん きくに
旅僧進ぜ
出そなるに
雪ハ初めて
なれん守り
けに身の懺
悔つきらが
助けしとなる
ゆゑ身の悪
業を悟ら
るゝとりと並
さん君僧が功

なめに吉の死髪ハ生るが如く夏に
腐敗もなさるれば阿松ハ死髪に抱き
つれ知らぬことて今日の今又ぞろ根方の
俳蔵がこゝろに私も此吉に落て
危ふきを処を見なる此僧に
助けられ命ハ拾へどあさ返やとの
有さ夏ハ何るぞ弥に因果ハめぐり
来て俳蔵とても熊のこゝろに
飛命の死を逐因果に報ひハ
つまき此身の悪業なるこゝろ私
近此吉度で落合ふも是ゑ因果の
ゆる処今の今まで悟らざりしが死ねば
雅でも浅間いは亡髪のもちはしと

南無妙法蓮華經

妙顯院

つぎ 旅

僧も種々と仏の尼を解説し

終に沙弥の約を世が猶も

阿松は決女の仇を成らるさくやかひ

なん宵合火器の焼しを知

あげ我と我まで熱へ押寄

日海

☒ん倦果炊猫の犬もふくらび

去り菓ふる呂笈古今恋家

出ずは母の生死も和

まんとあべど

身

ふれ

一錢の畜へ

言れば侍ずかば

と忽ち悪心を起る

毒婦が性相

ぞぜひも

或歌家門の様

息を伺ひ和尚が居るの小草笥へ手を掛金を

最美くしき顔色も忽ち変る炊猫の

兵できずなと説まことといふ旅僧は更に怪び

気に兵なり彼僧は阿松を伴ひたらする甲斐

の国巨广頭延山寺村の山里なる僧にかく

生ひ短なと教へ変ゆ一年をなせしが

そもいちは山ちなれと日蓮宗

にて蓮正山妙能

寺となるまして近村に檀家

多くいと宵福に金なるを畜

和尚日海は朱ゝ四十にたらざれど

行堂国に彼阿松も香恥らひ身の懺悔

にひとこひは姿を換ふけしが不調明えるわらの世の

続も冥るうなれば阿松は山里に身は菊水の行をのとひ☒

阿松は今更面目

なれど身の苑を隠んと宵に

つゞき たりける○あ縞活法還て解松屋の
手代お花は一人蒲原の旅店に出去せられ
阿松が身の代の三十円は質合なれば かゝる
難義もおもの罰とその夜寐床をぬけ
出て裏手の井戸へ身を投んとせし所へ
忠義の父忠兵衛が悴の安否を尋ねんと
たちかゞ家に帰り合せ紙子なりともあらば遣て
取り止めて匹夫の徒は牡子が妻偶の對面に姿
の合を又よくいたれば質合にはあらざる故二人りは
森び路合に出て打連立て松屋へ西の忠義が
先非を悔悟の術云ふ人もなつゝが
あれとよろこび放なく皆入たりしゆゑ
見迄の悲報ドと家業に精を出せしが
尋もなく嘆蔵をのがひうけ店を開きて

宵福の身となり浪或日西行井の弘法大師へ
乗り込み語不汁もまた仕事て松が寝ませる
姿をとて仇に答るに恩を以てまた太義の仁
慈五円の金を惠でやり余そなからの恨乞も
見ぞ一世の別れにて阿松は沒入説なる母にあるの
仕に至りて金にて治療を受せど菜の
きゝめも更にいたえず病ひいますく重く成り
大の如くに狂ひ出りて死たるは明治十年
二月九日の事にして積悪その身に
むらひ来てかゝるをたりをれしなるべし
狐の人を化かすや一朝一夕宮怪婦し美女の
歎心仮面の宮嗚呼思ひても思ひべしと
東天の姉文にてまるかなと
嘆じて夜に草を閉く

田舎源氏五十四条 二帖
大日本物産圖會 五帖
俳優三十六花撰 一帖
東京開化卅六景 一帖
小学入門彩色入 一帖
同 寸珍本 一帖
鹿児嶌實記一話 三冊
鳥追於雲海上新話 前 三冊
同 後篇 三冊
古今名婦傳 一帖

和漢書籍
東錦繪問屋
古板御届
東京第二大區十小區第十一番地
文保田彦作
東京第一大區二小区通一丁目十九番地
大倉孫兵衛

010190508361